

# 「日本3.0」

Vol.6

## コスモナショナリズムのすすめ

text by Norihiko Sasaki

文 佐々木 紀彦

ここ最近、日本で右傾化が進んでいると言われます。

ネットでは嫌韓・嫌中の言説が溢れ、老人向けの論壇誌では「日本はこんなにすごい」といった自画自讃の特集がひんばんに組まれています。若いも若きも、愛国主義に傾いているように見えなくもありません。

一方のリベラル陣営も、朝日新聞、民進党、鳥越俊太郎氏を筆頭に、現実から遊離した主張を繰り返し、信頼を失ってしまっています。

世間の多くの人は、「右も左も信頼できない。なぜこんなにバランスの悪い、現実感に乏しい言論ばかりなのだろう」と呆れているのではないだろうか。

私自身、ここ数年、こうした不毛な右左の現状を乗り越えるにはどうすればよいか悩んできましたが、答えはシンプルであることに気づきました。

キーワードは、コスモナショナリズム。これは、コスモポリタニズムとナショナリズムを組み合わせた造語です。

つまり、ナショナリズムを否定するのではなく、健全なナショナリズムを育て、それをコスモポリタニズムへとつなげていくということです。ナショナリズムとコスモポリタニズムは矛盾しないのです。共存できるのです。

家族、地域、仕事、日本という足元のアイデンティティをしっかり確立し、敬意、それを世界と対立するものではなく、世界に資するものとしてつなげていく。言い換えれば、オープンな保守主義とも言えます。

保守主義とは、偏狭な伝統主義、排

外的な愛国主義とはまったくの別物です。保守思想の元祖といわれる、エドマンド・バークは愛国心についてこう語っています。

「われわれの公共心は、まず家庭の中で育まれる。それがやがて、近隣の人々や、地域社会のつながりへと発展してゆく。

地元に着愛を抱くことは、国全体を愛することと矛盾しない。いや、まずは地元を愛してこそ、国という大規模で高次元なものにたいし、個人的な事柄のごとく愛着が持てるようになるのだ」

この理屈はそのまま、コスモナショナリズムについても当てはまります。家庭、地域、日本で公共心を育ててこそ、それが日本への愛と、世界に貢献しようという意欲につながるのです。そうしたコスモナショナリズムを持つ日本人をひとりでも多く育てること。それが現代の大人に課せられた義務ではないでしょうか。



### Profile

NewsPicks編集長

1979年福岡県生まれ。慶應義塾大学総合政策学部卒業、スタンフォード大学大学院で修士号取得(国際政治経済専攻)。東洋経済新報社で自動車、IT業界などを担当。2012年、「東洋経済オンライン」編集長に就任。リニューアルから4カ月で同サイトをビジネス誌系サイトNo.1に導く。2014年7月から経済ニュースサイト「NewsPicks」の編集長を務める。著書に「米国製エリートは本当にすごいのか?」「5年後、メディアは稼げるか」がある。